

# バラとすみれ

第55号

## 青木恵哉師説教

リデル、ノット、ライト顕彰会  
令和六年度企画展は、「青木恵哉展」  
を開催しております。そこで本号は、  
青木恵哉師が昭和三八年九月八日に  
恵楓園東礼拝堂において、早禱式中  
の説教録音から説教の記録を作成し  
たものです。貴重な音声の録音再生と  
ともに青木師の思いにふれる機会と  
したいと思えます。



### 青木恵哉説教

一日時 昭和三八年九月八日(主日)

一 場所 恵楓園東礼拝堂

一 内容 早禱式中の説教

### 聖歌二百九十二番

一 よろこびの みつけ あまねくのべよ

こは すくいぬしのおおせのみむね

二 みこを 世にたもう みいつくしみの

よろこびの みつけ あまねくのべよ

三 すべての よびとを あがない ましし

よろこびの みつけ あまねくのべよ

四 あわれみ とりなす きみの まします

よろこびの みつけ あまねくのべよ

五 なぐさめの みたま つかわしたもう

よろこびの みつけ あまねくのべよ

六 もれなく いすこの さとの たみにも

よろこびの みつけ あまねくのべよ

### アーメン

父と子と聖霊のみ名によりて。

今週の福音書、祈禱書の三百二十八頁にござ  
います。ルカ伝の十章二十三節以下のみ言葉  
を読ませていただきます。

「イエス弟子たちを顧みひそかに言ひ給ふ『なんぢ  
らの見る所を見る眼は幸福なり。われ汝らに告ぐ、

多くの預言者も、王も、汝らの見るところを見んと  
欲したれど見ず、汝らの聞く所を聞かんと欲したれ  
ど聞かざりき』視よ、或教法師、立ちてイエスを試

みて言ふ『師よ、われ永遠の生命を嗣ぐためには何  
をなすべきか』イエス言ひたまふ『律法に何と録し

たるか、汝いかに讀むか』答へて言ふ『なんぢ心を  
盡し精神を盡し、力を盡し、思を盡して、主たる汝  
の神を愛すべし。また己のごとく汝の隣を愛すべ

し』

イエス言ひ給ふ『なんぢの答は正し。之を行へ、さ  
らば生くべし』

彼おのれを義とせんとしてイエスに言ふ『わが隣と  
は誰なるか』

イエス答へて言ひたまふ『或人エルサレムよりエリ  
コに下るとき強盜にあひしが、強盜どもその衣を剥

ぎ、傷を負はせ、半死半生にして棄て去りぬ。

或祭司たまたま此の途より下り、之を見てかなたを  
過ぎ往けり。

又レビ人も此處にきたり、之を見て同じく彼方を過  
ぎ往けり

然るに或るサマリヤ人、旅して其の許にきたり、之を見て憫み、近寄りて油と葡萄酒とを注ぎ、傷を包みて己が畜にのせ、旅舎に連れゆきて介抱し、あくる日デナリ二つを出し、主人に與へて「この人を介抱せよ。費もし増さば、我が歸りくる時に償はん」と言へり。

汝いかに思ふか、此の三人のうち、孰か強盜にあひし者の隣となりしぞ』

かれ言ふ『その人に憐憫を施したる者なり』イエス言ひ給ふ『なんぢも往きて其の如くせよ』。

この福音書にございますように、このよきサマリヤ人のたとえ、これは聖書を読むものの、また特にルカ伝を読む人々が、放蕩息子のたとえとともに、このよきサマリヤ人のたとえは、多くの人々から私達に、皆さんと共に、今日まで、数々教えられてまいつたところでございませぬ。

かく、イエス様が汝も往きて、そのごとくせよ。ここに教えられておるんでございますけれど、自分の身内のあるものは自分の隣国、そういったもののためには、深い愛をもつて愛してくださいとさるところの方は、たくさん或るんであります。このよきサマリヤ人つまり、ユダヤ人とサマリヤ人との間にはあまり仲の良くないところの、常にさげすんだり、さげすまれたり、そこにいろんな問題の多かつた、そういった間柄でありました。そういったもの

に対することの博愛と云うことを行う人は、非常に少ないのであります。

しかし、そこにイエス様は、その如くせよ。私たちが近いものを愛するものでは足りない。イエス様を信ずるほどの者は、あなた方は、この博愛心をもつて生きねばならないということをお教えになったことを知るのであります。そうして、このみ言葉を本当に私たち日本人のために、遠く海外から、イギリスからこの地に渡られ、そうしてこの地で、このみ言葉を本当にその如くに歩まれた方は、私たちの教母リデル様であることを私たちは、本当に心から知っているものであります。そうして、その愛に皆さんとともに本当に感激したものでございます。

リデルさんの歩まれた、私たちそういった弱い者を愛してくださいと、その愛の事実、それは本当に例えるならば、数々のものがございませぬ。そのことを私ここで皆さんの前でお話したいのであります。自分のごとき者がこういった不徳の者が、リデルさんのその徳をたたえるのは、あまりにも、それは、言葉をもつてつくすことのできないものが多いのでございませぬ。

今日のこの福音書の中に、イエス様がこのたとえをお教えくださったそのまゝに「イエス弟子

たちを顧みひそかに言ひ給ふ『なんぢらの見る所を見る眼は幸福なり』。

われ汝らに告ぐ、多くの預言者も、王も、汝らの見るところを見んと欲したれど見ず、汝らの聞く所を聞かんと欲したれど聞かざりき』。とここに申し上げておりますのは、それは、このたとえをお話になさる、これ以上にイエス様ご自身のみ言葉を聞き、またイエス様を光の子として、真実としてイエス様に救いのかかわりをもつていただくが我々にいかにありがたいことであることをここに教えになつておられることを忘れてはならないことをしるものであります。

私は自分のことをここで申し上げるのは恥ずかしいのですけれど、

大正七年の六月に洗礼を受けまして、今日まで四十六年、五十年に近いところの、その間におきまして、イエス様を信ずる信仰として、

そして隣を愛する愛に生きたならば、本当にそのうできたのですけれども、それができておらない、まことにそれは恥ずかしいところの一生涯であったことを知るのであります。そして、つねに一年の間において、今年こそは、思い切つてスタートをきつたのでありますけれども、この一年は自分の思うような一年ではなかつた。

毎年毎年そういったことをくり返してきたのが

自分の生涯であったことを知るのがあります。

しかしこういった中でただ一つだけ、一つだけ続けてきたところのものがございます。それは何でありますかと申しますと、毎年・・・をたらす一か年を送るわけでありましたが、三百六十五日を送って、いざ大晦日と言う日が毎年やってくるであります。大晦日、明日は新しい年の元日である。その日を迎えんとするその前日前夜というときは、本当に一年をかえりみて、いろいろ思い出すのであります。その思い出は多く悔いでありませぬけれど、本当にできなかった。そして数々の願わなかつたところのことをすべてして懺悔の年末であったのでありますけれど、その新しい年を迎えて、今度こそはというその大晦日の夜に、私、毎年そこに祈りをして、懺悔をして、そこに示されたところの聖詩つまり第一番に考へることは、その聖詩であります。神のみ言葉でありますけれど、そのみ言葉を静かに瞑想して、そして示された聖句を本当に一番好きな自分の好きなところの聖句を心にとどめて、そうして、それを新しい年を迎えた新しい明日に、書初めというものは、一月二日の朝にするものだそうですけれども、私はいつも毎年その一月元旦の朝に、何もしない前にその示された聖句をその、こういったところのカード、つまりカードを用意しておき、カードに聖句を書いて、それ

を新しい年の迎えた年の書初めをしてから、そして、それを新しい年の進むべき、またこれをその聖句において、深く考え、その聖句によつて、それを杖として、力として、いつもその年をスタートするわけでございます。

そして、今年はこちらで示されたのが、ロマ書の十章十三節のみ言葉すなわち「すべて主のみ名を呼び求める者は救われる。」というこのみ言葉を与えられたのであります。すべて、だれでも、私のようなあやまちの多い、悔いの多い、どう考へてみてもこれではいけないと思うこの私のような者でも、主のみ名を呼び求める者は、誰でもすべて救われる。この聖句を私に与えられて、これを今年の標語としているわけでございます。これももとにまことに自分にとつて、あやまちの多い、この上もないことこの福音であることを知るのであります。

今日は、・・・にてたよりに、もしそこに私のようなこの一年にあやまちのなかつたということが仮にあつたとしても、本当に十人が十人、百人が百人、あの人はというようにあがめられる、行いにおいても言葉においても、そこに一つの欠点もない、自他ともにその生涯を送つておるといふ人が、もしありましようとその人がイエス様を信じていないところの人であるならば、どれだけ完全な人であろうとも、その人は救われるんです

よ。これは、・・・ねばならないことであると思われます。

もう透き通つた水晶のように少しもあやまちがない人でも、もしその人が、神がのたもうたところの主イエスの福音を否定するところの人であるなら、その人は救われんですよ。

それに反して、誰から見てもあやまちの多い、そして、みんな悪く言うものじゃありませんが、仮に皆の人から悪口をいう、あんな奴がと言われるもので、どうにもならない、自他ともにもうこんな恐ろしいものはないというものがそうありましようとも、その人がイエスキリストを信じる、信仰にあらわすならば、イエス様の十字架の贖いというものは、このくらいの人には救われるけれども、このような人は救われぬというような、そういう救いにおいて限りがあるのでしようか。そうではないということを知るのであります。

もう全世界で一番の最悪の者が、もしありましようとも、その人が主イエスキリストを信じる信仰、イエス様をあがむのなら、イエス様の十字架をその人が自分の主人として、またイエス様の死を受け入れるなら、たとえどれほどに過去に悪をもつておりましたとも、どうような人もイエス様は、救つてくださるところの全能の救い主であることを私は確信するものでございます。そうした意味において、このあやまちの多いもの、

このあやまちにおいても、言葉や行いにおいてもあやまちの多いところの自分のようなものでも、ここに、この身こそ与えられる。すべて、なお主のみ名を呼び求めるものは、誰でも救われるという、このみ言葉を今年与えられたということは、私は非常に恵みであることを感謝している次第でございます。

こういつた時に、私はこうして三十六年のといひまするが、今度日本に帰ってくる、この愛する祖国に帰って来ることができ、特に道が開かれた。そうして、その道は険しかった。その帰って来る道は、非常に、非常に困難に思われた。けれども、その道は、いざそちらに渡って行こうとした時は、それは思いもよらず。最悪から常に最善に導かれまして、そしてこの度沖繩の端から青森の先まで、みな秋田の方まで行って参ることができました。それで、その行脚において、もう健康な人も行くことができないような各地の日本の素晴らしい自然の中に神の救いたもうたところの

におどろくほどの人の愛、神様の愛をすることができたのであります。

今年、昨年から一年中病気のために床に就いておりました、しかし今年こうして健康が与えられ、ことに、あちらをでる時は、不安な状態でありました。けれども半年の間、こうして旅行をする間に、その皆さんがおみかけのとおり健康というものが、これから以前に勝るところの健康が再び与えられたことを感謝する次第であります。

で、今度再び沖繩に帰るんでありますけれども、あちらに帰ったところが、この歳です。別にこれということは何もできないと思ひます。他の皆さん方にお世話になるばかりであります。反つてお邪魔になるばかりかと存じますけれども、やはりあちらにあつて本当に神の愛の中で、人様の愛の中に支えられ、これから残る生涯をおくつていきたいと思ふ次第であります。

こういつた恵みの日を迎えて、そして恵みの時を過ごしてまいりましたのも、ほんとうに考えてみますると、この三十六年といひますが、その前、四ヶ年、あちらに回春病院の方でお世話になったのでありますからして、四十年前に我々の教母リデル様に救われてそして、あそこにあつて、愛の洗礼を受け、導かれたたことをおかげさまであるということを知る者であります。

今日こうして皆様の前に立つて、かえりみみますると、感慨無量のものがございます。

そして、その間におけるところの問題が御座いましたが、けれどもすべてそれが、神の愛によつて解決され、導かれまして、今日になったのであります。ほんとうに、皆さん方が励まし、祈つてくださったところの祈りのおかげである。また、同時に神様の大きな恵であることを心から感謝して、感謝に耐えない次第であります。

今年与えられましたそのみ言葉「すべて主のみ名を呼び求めるものは、救われる。」このみ言葉を申しあげまして、私のお話を終わりたいと思ふのであります。

どうもありがとうございます。

\*傍線は聞き取れなかつた部分です。

二〇二四年四月十一日

リデル、ライト両女史記念館

秋山大路